HOME

お冨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＨＯＭＥ

【Ｎコード】
Ｎ６２９３Ｏ

【作者名】
お冨

【あらすじ】
地球教の情報を得るため、地球に向かったユリアン・ミンツ達は、帝国軍による地球教討伐作戦に巻き込まれた。ワーレン提督と知己を得たユリアンは、帝国軍の情報を得るため帝国首都オーディンに潜入する。ここから歴史は思わぬ方向へと進みだした。

相変わらずのトンデモ設定です。ヤン提督が生き延びているのはお約束（笑）　皇帝ラインハルトと喧嘩友達しています。

序章　1（前書き）

この作品は、原作を知っているという前提で書かれています。主要キャラは全て原作キャラです。ただし、原作からはどんどん乖離していきます。

序章　1

地球での情報収集を終えたユリアン・ミンツ、オリビエ・ポプラン、ルイ・マシュンゴらの一行は、ボリス・コーネフが船長を務めている商船『親不孝号』で、一路ハイネセンへ向かった――――わけではない。

故意と偶然が重なって、地球教討伐作戦を終えたワーレン艦隊の後尾につき、帝国首都オーディンへ向かうことになったのだ。

すでにこの時点で、ヤン・ウエンリーとその一党はハイネセンから家出する羽目になっていたのだが、事は極秘事項であり、一介の独立商人風情が知ることなど不可能だった。

航海の途中、ユリアン・ミンツは、商売上の損害額が算出できたので弁償してほしいと、図々しくもワーレン提督の旗艦に乗り込んだ。

欲を出したのだが、金銭面でではない。ヤン提督への土産に、帝国軍の情報を加えたかったのである。

ワーレンはこの青年が何となく気に入って自分で対応した。もちろん、重要な任務が終了し、後は帰還するだけという状況でなければ許されなかっただろうが。

「ワーレン閣下に、お願いがあります」

青年と言うより、少年のような瞳でユリアンが言ったとき、ワーレンは大抵のことなら聞き入れる気になっていた。

「なんだね」

「是非、僕とシミュレーションゲームをしていただけませんか」

「ほう」

「僕、これでもシミュレーション、強いんです。船に乗っているので、そればっかりやっています。みんな僕の相手してくれなくなっ

ちゃって、つまんなくて。それに、提督閣下にお相手していただけたらみんなに自慢できます」
ワーレンにしてみれば、怖いモノ知らずの素人相手の気晴らし以上にはなりえない提案だった。そいれが機密漏洩の油断につながったと断罪するのは、酷と言うものだろう。

こうして、ユリアンは旗艦のコンピュータールームに入り込むことに成功した。直接データを盗み出すことはさすがに不可能だったが、小型の記録装置に立体映像と音声を収めた。
後で分析すれば、何か分かるだろう。情報は多いほうがよいに決まっているのだから。

二対一のハンデで艦隊戦を始めたとき、ワーレンは軽い遊びのつもりだった。いくら強いと言っても、素人の子供相手だ。ところが十分もしないうちに彼は認識を改める必要に迫られた。
ユリアンは持てる能力の全てをあげていた。生来の真面目さであろう。わざと負けるなど、思いもよらない。それに、相手は帝国軍の名将。どうせ簡単に負けてしまうにしても、恥ずかしくない戦いをしたかったのだ。

ゲームは延々三時間以上続いた。その長さだけでも、特筆に値しただろう。
シミュレーションでは、実際の戦闘の二十倍の時間スケールで展開する。六十時間にわたる戦闘でワーレンを勝利せしめないというのは、只者ではなかった。

ユリアンは常に兵力の三分の一を予備戦力として休養させ、残る三分の二で数的優位を保ちながらワーレンに連続攻撃を仕掛けた。奇をてらわないが、確実で隙のない用兵ぶりだった。
ワーレンはともすると数で圧倒されそうになり、全兵力を動員せ

ざるを得なかった。兵力の消耗が無視できない水準に達する前に、彼は中央突破による敵の分断を試みた。

やはり、いくら強くともしょせんは素人である。ユリアンの艦隊は、易々とワーレン艦隊の突進を許してしまった、かのように見えた。そして、それこそがユリアンの待っていた瞬間だった。

ワーレンは唖然とした。分断に成功したと思った瞬間、一転して、三方から包囲されてしまったのだ。分断したかに見えた右翼と左翼に挟み撃ちにされ、さらに天底方向から予備兵力の全てを叩きつけられて、あえなくワーレン艦隊は壊滅してしまった。

ユリアンが額の汗を拭いたとき、シミュレーションコンピューターの周囲にできた人垣から、どよめきが起きた。

「凄かったです。有り難うございました」

演技ではなく、ユリアンは実際に頬を上気させ、興奮に震えていた。そんな彼の肩を、幾人かの士官が叩いた。

ワーレンは率直に自分の敗北を認めた。子供相手に嫉妬するなど、彼の矜持が許さなかった。

「とても自己流とは思えん。どこかで正式に戦術を習ったことがあるだろう」

ユリアンとしてはヤン・ウェンリー直伝だと自慢したいところだっが、無論、そんなわけにはいかない。

「僕を育ててくれた養父が、戦史に詳しくて、古代の戦争をいろいろ教えてくれました」

「ほう、古代というと？」

「まだ、ＡＤの年号が使われていた時代だそうです。槍とか弓矢とかをつかった戦闘の話をいっぱいしてくれました」

「それはまた、古い話だな」

ワーレンは素直に感心した。

「大したものだ、卿は。商人にしておくのは惜しい。どうだ、軍人になる気はないか」
ユリアンは息を飲んだ。チャンスだ。帝国軍にもぐりこんで、情報収集出来る。
「ほんとに？軍人にして頂けるんですか。ほんとに僕を？」
青年の歓喜の声に、ワーレンは思わず微笑んでいた。

「本気か、オーディンに潜入するなんて。無事に脱出できる保証はないんだぞ」
ポプラン中佐の心配は当然のものだった。
「ええ、ワーレン提督とコネもつけられましたし、せっかくの機会です。帝国の内情をこの目で確かめたいんです。それに…」
ユリアンには、ヤンの元に戻ることにためらいがあった。せめて一年ぐらいは新婚生活を邪魔したくないのである。
ユリアンの心情を察して、ポプランは手を振ってみせた。
「ああ、分かったよ。せいぜい素敵な彼女をみつけることだな。花嫁を連れて帰れば、きっと、ヤン提督もひっくり返るぜ」

ユリアン・ミンツは、ヤン・ウェンリーが平穏とは言い切れぬまでも、ハイネセンでのんびり年金生活を送っていることを疑っていなかった。もし、ヤンの身に起きたことを知っていたなら、何をおいてもヤンの元へ駆け付けていただろう。
そうでなかったので、地球教の情報を収めた光ディスクをボリス・コーネフに託し、1人、オーディンにとどまった。

序章　2

ワーレン提督から地球討伐の詳細な報告を受けた銀河帝国皇帝ラインハルト・フォン・ローエングラムは、彼をシミュレーションで負かした商人の話を聞いて興味を示した。
「ほう、まだ十八才か。で、名前はなんというのだ」
「は、ユーリ・ペトロフと申します」
ユリアンの名乗った偽名を報告する。
「両親は既に死亡しており天涯孤独の身の上と話しております」
ラインハルトは、一つ頷いて言った。
「会ってみたい。明日、連れてくるように」
ただの気紛れであっても、皇帝の言葉は絶対である。翌日、ユリアンは、帝国宰相府の客人となった。

皇帝ライハルトの顔を直接見るのは、これで二度目である。もっとも一度目は、地上車で通り過ぎる彼を、沿道の人波から垣間見ただけであるが。
謁見は、ほんの数分のことだった。ラインハルトは多忙であり、ほんの気紛れから呼んだ青年に時間を割いていられなかったのだ。
しかし、ユーリ・ペトロフがうち捨ててしまうには惜しい人物であることを敏感に感じとり、その場で何事かを次席副官のテオドール・フォン・リュッケに言いつけた。その結果が、シミュレーション対戦だった。

五分と五分の兵力で、ユリアンはコンピューター相手に艦隊戦を始めた。途中で、ユリアンは相手の優秀さに驚きの念を持った。柔軟な対応といい、的確さといい、速さといい、帝国の戦術コンピューターは同盟以上だ。
なんとかこのコンピュータープログラムだけでも持ち出したい。

自分の対戦記録がほしいとねだってみようか。
それ以上、思案することは出来なかった。押しまくられて防戦するのに精一杯で、他のことを考えている余裕が無くなってしまったのだ。

たかが機械ごときに、負けるもんか。
知らず知らずの内に、ユリアンはむきになっていた。それが彼の若さであったろう。いつしか本気でゲームにのめり込み、勝つためにあらゆる戦術を駆使していた。
陽動し、罠を仕掛け、敵が乗ってこないとみると、それ等に固執することなく持久戦の態勢をとった。勝つことよりも負けないことに徹してしまうと、相手も攻めあぐんだのだろう。消耗戦の様相を呈したとき、ついに敵艦隊は退却を開始した。
ユリアンは追撃しなかった。それだけの余力が残っていなかったこともあるが、敵の見せる隙がわざとらしく、罠の可能性を捨てきれなかったからである。

「参ったね。とうとう、互角に戦ってのけたか」
蜂蜜色の髪をした青年士官が現れたとき、ユリアンは驚きの声をあげた。その顔に見覚えがあったからだ。
「ミッターマイヤー元帥！」
「ほう、私の顔をご存じとは、光栄だね。なかなかみごとな戦いぶりだった。私も久し振りに楽しませてもらったよ」
「…！」
コンピューターだとばかり思っていた相手が、帝国軍宇宙艦隊総司令長官と知って、ユリアンはしまったと思った。
目立ちすぎてしまった。これではこっそり抜け出すのが難しくなる。
名状しがたい表情を見せた青年が、慌てて頭を下げるのを、ミッターマイヤーは笑いながら制した。

「どうだ、ワーレンも卿に勧めたそうだが、正式に軍人になる気はあるか」
ユリアンは大きく息をを吸い込んだ。
こうなれば、毒を食らわば皿までだ。ヤン提督の反乱計画が軌道に乗るまで数年はかかることだし、ひとつ、敵の懐に飛び込んでやろう。
ユリアンは、自分で思ってる以上にふてぶてしいのかも知れない。とっさに決断を下すと、緊張した声で答えた。
「是非、お願いします」

この決断が、後の歴史の展開に決定的影響を及ぼすことになるのだが、この時点では、誰一人として予測し得なかった。

第一章　ユーリ・ペトロフ　1

ユーリ・ペトロフことユリアン・ミンツの処遇は、すぐには決まらなかった。
士官学校に入れるには年齢が中途半端であったし、まだ十八才の商人出を、いきなり士官として登用することもためらわれた。
しかし、その用兵の才はラインハルトも認めるところであり、なまじな任務に就けるにはもったいなさすぎる。さて、どうしたものだろう。

「形式などどうでも良い。側に置いて、実戦を経験させてはどうだ。シミュレーションと実戦では、似て非なるものだからな」
ミッターマイヤー元帥の言葉に、親友のロイエンタール元帥が応じた。
「では、俺の従卒にでもなってもらおうか。なかなか面白そうだ」
「珍しいな。卿が他人に興味を示すとは」
「俺は別に隠者ではないぞ。ワーレンを負かし、卿と引き分けたと聞けば、興味を持って当然だろう」

そんなやり取りの後、ユーリ・ペトロフは、下士官待遇の従卒としてロイエンタール元帥の身の回りの世話をいいつかった。
これはユリアンにとって、願ってもない地位だった。従卒の仕事はやりつけているし、なにより、統帥本部総長にくっついていれば、居ながらにして帝国軍の中枢部に入り込める。
ユリアンは喜々として、ロイエンタールの官舎に向かった。

ロイエンタール元帥は独身で、ユリアンが来るまでは一人暮らしだった。
屋敷の方には大勢の使用人もいるらしいが、大本営に近いという

理由で選んだ官舎には寝に帰るだけで、普段は空き屋同然だという。
それでも、貴族社会の名残だろう。独身士官用とはとても思えない設備と広さを誇っている。同盟の感覚で言えば十分御屋敷と呼んで差し支えない。実用本位の官舎でこれなら、本物の御屋敷は城と言って良い規模じゃなかろうか。

まあ、所変われば品変わるだし、郷に入れば郷に従えって言うし、贅沢すぎると文句を言うのは何か違うし……。

どうにもスッキリしないモヤモヤを抑えつけ、ユリアンは行動を開始した。理由はどうあれ、当分の間、ここが我が家になるのだ。場違いだと感じるなら、居心地の良い居場所を作ってしまえば良い。
開き直ったユリアンは、即日、官舎を整理し、多忙に任せてほったらかしにされていたホームコンピューターに情報を入れ直して、地歩を築いた。
朝食を作り、ロイエンタールを送り出すと、家の整理をし夕食の献立を考える。一人での留守番は、出征で留守の多かったヤンで慣れている。
夕食の後、また仕事に戻ることの多いロイエンタール元帥は、本当に激務だ。それでも、ユリアンの様子見を兼ねて、必ずいっしょに夕飯を食べてくれる。

なんだか、昔に戻ったみたいだ。
ハイネセンでヤンと暮らしたシルバーブリッジ街の生活が思い出されて、切なくなった。

もちろん、まるきり同じというわけではない。もう学校に行く時間を気にしなくていいし、女性からかかってくるヴィジフォンに応

対するという、ヤンの場合には考えられない仕事まであった。

一度など、雨の中、門の前で立ちつくしていた女性に声をかけてナイフで切りかかられたこともある。難無くナイフを取り上げて穏便に済ませたものだ。

官舎に入って濡れた服を乾かすように言ったのだが、ユリアンがタオルを取りに行っている間に姿を消してしまい、それっきりになってしまった。

報告を受けたロイエンタールは、顔色ひとつ変えなかった。

「ほう、美人に待ち受けられるのは歓迎だがな。ところで、ユーリ、明日から統帥本部に連れて行くから、そのつもりで用意しておけ」

「はいっ」

いよいよだ。ユリアンは胸が高鳴るのを覚えた。

第一章　2

翌日、ユリアンはロイエンタールのお供をした。
すれちがう士官達が、一様にほうっと声にならない声をあげて振り向いていく。
無理もない。金銀妖眼の青年提督は自他共に認める美男子だが、その後ろに従う青年下士官も、なかなかどうして絵になっていた。
初めて着た帝国軍の軍服が、嘘のように決まっている。階級章は軍曹だが、提督服をまとわせても違和感はなさそうに見えた。
皇帝ラインハルトでさえ、美しい若者だと言ったとか言わないとか。とにかく、目立つ二人だった。

ユリアンは努めてあちこちに顔を出した。情報収集が目的である以上、控え目に引っ込んでいては仕事にならない。どうせ長居する気もなかったし嫉視されることにも構わなかった。

「ほう、卿がワーレンを破ったユーリ・ペトロフか」
遠慮の二文字と無縁な大声を上げたのは、ビッテンフェルト提督だった。
その他にも、穏やかな印象のメックリンガー提督や、弁護士を思わせるケスラー上級大将など、なだたる名将の知己を得ることが出来た。

イゼルローンでの捕虜交換のおり顔を合わせたキルヒアイス提督もそうだったが、帝国軍の提督達はユリアンに不快感を抱かせることがない。ユリアンでなくても、不思議に思わざるを得ないことだろう。
なかでもナイトハルト・ミュラー提督とは、イゼルローン攻防戦

で直接銃火を交わした仲なのである。

彼らを従える皇帝ラインハルトにいたっては、もし、ヤン提督への思いがなかったら、同盟を捨てて、臣従を誓ってしまいそうな気がしたほどであった。

間近でその炎にも似たきらめきを見つめると、眼を焼いてしまいそうになる。ユリアンは、ただただ圧倒されるばかりだった。

ただ一人の例外とも言えるのが、オーベルシュタイン元帥の存在だった。ドライアイスの剣と渾名されていることを知って、心に頷いた程である。

彼と顔を合わせるたび、その有名な義眼で正体を見透かされているような気がして仕方が無かった。

いや、ひょっとしたら、もう見破られているのかも知れない。知っていながら、泳がせておいて、いざとなったら人質にする気でいるのかも。

「ロイエンタール元帥。ユーリ・ペトロフの事で話があるのだが」

突然来訪したオーベルシュタイン元帥の言葉に、ユリアンは心臓が飛び上がったかと思った。

「何かな、オーベルシュタイン元帥」

ロイエンタールの声は、意識してかどうかは分からぬが、オーベルシュタインのそれよりも冷たかった。

もともと二人の仲は、良好とはいいがたい。

「卿の従卒を、一時お貸し願いたい」

バレた！

ユリアンの背に、冷たい汗がしたたった。

「ほう、理由は？」

「皇帝の許可も頂いてあるが、私の助手をつとめてもらいたいのだ」
ロイエンタールはあっけにとられた顔をした。
「卿の助手だと？」
驚いたのは彼だけではない。許可をもとめられた時のラインハルトも、その一人だった。
「あの者、確かに只者ではありません。どれほどの才能の持ち主か、確認してみたいのです。将来、陛下を補佐する重要な人物になるかと考えます」
「珍しいこともあるものだ。卿は、不適当な部下を切り捨てることばかり熱心だと考えていたがな」
やや皮肉を込めたラインハルトの言葉を、オーベルシュタインは軽く一揖することで受け流した。
「あの者には、身内がありません。身元が無いということほど、確実な身元はありません」

オーベルシュタインともあろう者が、ユリアンの偽装を見破れなかったのには訳がある。
身内を無くしたユーリ・ペトロフなる人物が実在しており、しかも、その記録は名前と生年月日が登録されているだけで、映像もＤＮＡコードも付いていなかった。
独立商人の世界では、それが普通だったのである。

とにかくユリアンは、オーベルシュタインの元へ出向くことになった。
ユリアンにとっては気の重い日々だったが、オーベルシュタインは、ユリアンの示した事務処理能力に満足した。それは、ユリアンがアレックス・キャゼルヌに師事した成果だった。
実のところユリアンは、自分の示している才能がどれほど高水準

であるか、意識していなかった。
ヤン・ファミリーにおいても、帝国軍においても、彼は水準を遠く抜きんでた大人に囲まれていて、自分と比べられる同年代の友人もいなかった。
彼の普通と考えるレベルが常識と懸け離れてしまったのも、無理のないことだったろう。
もちろん、シミュレーションは別である。
ヤン・ウエンリーの弟子としてかなりの自負を持っていたし、帝国の提督と対戦したこともある。
しかし、それ以外の分野では、大したことはなと考えていた。

ロイエンタールの元へ戻ってきたとき、ユリアンは心から安堵の溜め息をついた。錯覚かも知れなかったが、自分の居場所に戻れたと感じたのだ。
帝国軍の軍服を着てわずか半月、ユーリ・ペトロフは、帝国軍の中枢に、しっくりと溶け込んでいた。
その力量は、オーベルシュタインでさえも認めており、皇帝の覚えもめでたかった。
嫉妬の視線も彼を直接知るようになると、なぜか消えてしまうのだった。

「不思議な奴だな。なんだか、生まれたときから軍人のような気がしないか。もう何年もここにいるような感じだ」
「同感、同感。それより卿は知っているか。ペトロフがついてから、ロイエンタール元帥がぱったり女を寄せ付けなくなったそうじゃないか」
兵士達の噂話は事実だった。冷笑家で、親しい友人といえばミッターマイヤー元帥ぐらいしかいないロイエンタールだったが、ユーリ・ペトロフには心を許していた。

「だいぶしごかれてきたようだな。疲れた顔をしている」
「そんなこと、ありません。色々と教えていただきました」
そう言って、ロイエンタールのために慣れた手つきでコーヒーをいれる。
「どうぞ、元帥」
「うん、ありがとう」

ロイエンタールがありがとうという言葉を素直に口に出すことは、希有なことに属していた。そうとは知らず、ユリアンは自然に受けとめる。
「何かお持ちしましょうか」
「いや、いい。それより、今日はもう寝なさい。近々、出動があるかも知れぬ。疲れを残していては、充分働けんだろう」
ユリアンの手の中で、コーヒーカップがカチャンと悲鳴をあげた。

「何か、起きたのでしょうか」
不安気なユリアンに、ロイエンタールは苦笑した。
「そんなに線が細くては、一人前の軍人にはなれんぞ。実戦を経験させてやりたいが、そのためだけに戦いを起こすわけにはいかぬな。まぁ、このまま平和が続くと決まったわけではないがな」

狼狽の原因を誤解してくれたことにほっとしながら、ユリアンはそれ以上の会話を避けて部屋に下がった。

同盟に何か起きたのかもしれない。ヤン提督は無事だろうか。
ユリアンの心の不安の雲は、なかなか晴れようとしなかった。

それが氷解したのは、フェザーンへの大本営移転が発表されたときだった。
ユリアンはロイエンタールにくっついて、初めて帝国の艦船によ

る恒星間飛行を経験することになった。

第一章　3

帝国軍の主要人物達がフェザーンに移ってから、一月あまりが過ぎた。
大本営移転という歴史的大事業は、まだまだ完了には程遠かったが、それなりの落ち着きを示し始めている。
ロイエンタール元帥の官舎でも、引っ越しのささやかな混乱がようやく治まり、まずまず平穏な日々が続いていた。

「それで、ビッテンフェルト提督に送っていただいたんです」
ユーリ・ペトロフの笑顔での報告を聞きながら、ロイエンタールは自分が不機嫌になっていくことに気付いて驚いた。
何故、いらつくんだ。
原因を探って、自分の心を覗いてみる。
ひょっとして、こいつは嫉妬か。
あくまで冷静に自身を客観視してしまう自分がいる。その事実にいまいましさを覚えながらも、認めざるを得なかった。
ロイエンタールは自信に溢れた男であり、能力も実績も人並み外れて持っている。嫉妬されることはあっても、嫉妬することとは無縁だった。それが、ユリアンに嫉妬しているのだ。

誰からも好かれるのが羨ましい。
いや、まて。ミッターマイヤーも皆に好かれているが、こんな気持ちは持っていないぞ。では、どこが違うんだ。

ロイエンタールは唖然となった。ユーリの好意を、一人で独占したがっている自分に気付いたのだ。

馬鹿な。これではまるで、恋ではないか。

「あの、どうかなさいましたか、元帥」

「いや、何でもない」

変に意識したので、素っ気ない口調になってしまった。

昼間、ミッターマイヤーと交わした話を思い出す。

「どうだ、いっそ、ペトロフを養子にしないか」

蜂蜜色の髪の親友は、彼に向かってそう言ったのである。

冗談じゃない。なんで俺がと反発したものの、心の半分が、そうなっても良いと呟いていた。

「家族というものは、良いものだろう？」

ミッターマイヤーの言葉に、つい頷きそうになってしまったのが癪にさわる。

実際、ユーリとの生活は、家庭の団欒に近いものだった。

ロイエンタールにとって、禁断の実であったかもしれない。一度でも手に入れると、手放せなくなりそうで、それでいて、絶対に手に入らぬものと知っていた。

俺はどうかしてしまうんじゃないか。

黒の瞳が、混乱の原因のユーリを追い出せと主張する。青の瞳が、ユーリを手放すことなどできぬとわめく。

自分の感情を持て余し、ロイエンタールは無理やり思考を仕事へ向けた。

ヤン・ウエンリーの一党の動向は、いまだに掴めないでいる。深海魚よろしく、宇宙の深遠に潜行したままだ。

同盟にどう対処するか皇帝はいまだに決定を下されず、事態は中

途半端のままであった。
考え込むロイエンタールの邪魔をしないよう、ユリアンはそっと部屋へ下がった。
今日の出来事を詳しく日記につける。それはそのまま、帝国軍の日常活動の記録であり、貴重な資料となるはずだった。

ユリアンも、自分の感情を持て余していた。
居心地が良すぎて、このままずっと日記のページを埋めていきたいという欲求がある。みんな良い人達で、帝国軍の軍人として責務を果たすことが、楽しいだ。

こんなはずじゃ、なかったのに。

ヤンの元にいたとき、ユリアンは専制国家の軍人になりたいなどと、一度も思ったことはなかった。それがこの変わり様である。
原因の一つに、ロイエンタール元帥の存在があることを自覚してもいた。
ユリアンの深層心理には、誰かに必要とされたいという強烈な欲求があった。
ヤン・ウェンリーが結婚したとき、それは行き場を無くした。
それからというもの、無意識のうちに、自分を必要としてくれる人を求めていたのだ。

元帥は寂しい人だ。家族を必要としている。本当はとても優しい人なのに、それを表現することに不器用で、誤解されることが多い。
ヤン提督にはフレデリカさんがいるけれど、ロイエンタール元帥には、僕しかいない。

ヤン・ウエンリーとは違った意味で自分を必要としてくれていることを、ユリアンは敏感に感じていた。しかし、自分の方がより相

手を必要としているとは、気づいていなかった。

一体、僕は何を見ていたんだ！

ユリアンは自分を責めた。

僕は阿呆だ。いくら極秘事項だからといっても、なぜ、気付かなかったのか。

ユリアンの日常生活が音を立てて崩れたのは、十一月十日のことである。

その日、全宇宙に向けて、銀河帝国皇帝、ラインハルト・フォン・ローエングラムの演説が発せられたのだ。

内容は、ヤン・ウエンリーのハイネセン脱出とレンネンカンプ高等弁務官の自殺、その背景となった、同盟政府の背信行為、バーラトの和約の破棄および再宣戦であった。

皇帝ラインハルトの宣戦布告以前に、同盟で変事が起きたことに気付いてはいた。

レンネンカンプ高等弁務官の葬儀が行われ、同盟との通信が頻繁に交わされていることも知っていた。

なのに、事態を把握できなかったのだ。

自分の無力さを呪いながらも、ユリアンは脱出のタイミングを逃してしまったことを認めなければならなかった。

戦時態勢に入ったフェザーン回廊は、民間の商船がうろちょろするには不向きだった。ボリス・コーネフさんに迎えに来てもらうど

ころか、連絡を取ることも難しい。

それに、抜け出したとしても、肝心のヤン提督がどこにいらっしゃるのか分からない。

状況から見て、いずれエル・ファシルに向かうのは間違いないだろうが、どうやってそこまでたどり着くかが問題だ。

やはり、途中までは帝国軍にくっついていくしかない。

それに、統帥本部総長の従卒なら、帝国軍旗艦ブリュンヒルトに搭乗出来るだろう。

こうしてユリアンは、皇帝ラインハルトの戦いぶりを、至近で観察する機会を得た。

そしてそれは、自由惑星同盟軍最後の戦いを見届けることでもあった。

第二章　回廊の戦い　1

ビュコック提督の旗艦、リオ・グランデが爆発四散した時、ユリアンは涙で何も見えなかった。　ユリアンにとって、ビュコック提督は祖父同然の人だった。

見事な生の帰結としての見事な死。その姿を間近で確認することになった自分の今の位置に、運命の皮肉を感じずにはいられない。本当にどうして、こんなめぐり合わせになったのか。

「どうした、ユーリ。怖いのか」

ロイエンタールの遠慮のない声が、ユリアンを叩(たた)いた。

「は、はい、済みません」

本心を押し隠し、あわてて、目をこすった。

「良い。泣いておけ。今に、泣きたくても泣けなくなる。人の死に慣れてしまうとということは、あるいは不幸かも知れんな」

柄にもないロイエンタールの言葉に、ラインハルトは軽い違和感を覚えた。

多分、彼も敵将の死に感動しているのだろう。それで、いつになく感傷的になっているに違いない。

「皇帝、残敵を掃討しつつ、帰還いたしたいと考えますが」

そう言った時には、もういつものロイエンタールに戻っていた。

許可をもらい、洗面所で顔を洗いながら、ユリアンはアル・マデッタの会戦を心で反芻(はんすう)していた。

帝国、同盟、どちらも見事な戦いぶりだった。もし、この会戦にヤン提督が加わっていたとしたら、どのような展開になっていたろう。

想像の翼をはためかせる間も無く、ユリアンの耳に、苦々しげな

声が飛び込んできた。
イゼルローン要塞が陥(おち)た！
ユリアンは驚いて、通路に飛び出した。通りすがりの兵士の腕を取って、勢い込んで聞く。
「あの、イゼルローンが陥たって、本当ですか？！」
「ああ、ヤン・ウエンリーにしてやられたんだ」
兵士はぶっきらぼうに答えたが、相手が少年兵ではなく軍曹だと気付くと、慌てて敬礼した。
ユリアンはそんな兵士を無視して、洗面所に駆け込んだ。そして自分一人になったことを確認すると、声を抑えて喝采を叫んだ。
やった。やった。さすがはヤン提督だ。きっと、あのふざけたキーワードを使ったに違いない。
「ロシアンティーを一杯、か」
ひとしきり、笑いの発作を爆発させてから、ユリアンはロイエンタールの側に戻った。
ロイエンタールの苦渋に満ちた表情に向き合ったとき、ユリアンの歓喜は急停止した。
さらに、メインスクリーンのルッツ提督の姿を見て、気の毒でたまらなくなった。
ひょとしたら、イゼルローン要塞をヤンに取り戻されて敗者の位置におかれたのは、ロイエンタールだったかも知れない。そうでなくて良かった。
ユリアンは心からそう思った。
帝国軍は、堂々とハイネセンに進軍した。その圧力に耐えかねたように、二月二日、自由惑星同盟元首ジョアン・レベロは暗殺され、

同盟政府は自壊(じかい)して果てた。
間髪をおかず冬バラ園での勅令が発せられ、皇帝ラインハルトは宇宙の統一を果たした。

極、一部の例外を除いて。

三月。
イゼルローン回廊には、大小様々な船が傾(なだ)れ込んでいた。同盟軍艦艇もあれば、民間船も多数に上り、ヤン・ウェンリーの兵力はみるみる膨れ上がっていった。
ただ、その中にユリアン・ミンツの姿はなかった。

「今頃、どうしているんでしょうかね、ユリアン」
オリビエ・ポプランが柄にもなく、心配そうに言った。地球から連れ帰らなかったことに責任を感じているのだ。
「なに、オーディンでなんとかやっているさ。もしかしたら、そのうちひょっこり顔を見せるかも知れないよ」
答えながら、ヤンはいくらかの安堵を感じていた。
寂しいけれど、ユリアンを戦場に引っ張り出さずにすむ。できるなら、あの子には平穏な職業を見付けてもらいたい。いくら本人の希望とはいっても、やっぱり軍人にはなって欲しくない。
それがヤンの本心だった。

その頃、ユリアンは帝国軍旗艦ブリュンヒルトの艦橋で、帝国軍の戦略構想を探ろうとしていた。それぐらいは持っていかないと、何のためにここまでもぐりこんだか分からないと思ったのである。

しかし、本当の理由は別にあった。

今脱出すれば、恐らく二度とここに戻ることは出来ないだろう。
ロイエンタール元帥とも別れなければならない。
そのことが未練となって、ユリアンの足を縛っていた。
もっとも、誰かにそう指摘されたなら、むきになって否定しただろうが。

第二章　2

宇宙歴八〇〇年、五月。
イゼルローン回廊は激戦の只中にあった。歴史に名高い回廊の戦いである。
これまでにもイゼルローン回廊を舞台にした戦闘は幾度となく繰り返され、第何次と番号をふって区別するほど頻繁に起きていたが、今回はあらゆる意味で特別だった。
まず、主役が違う。銀河帝国は王朝が交代していたし、同盟側にいたっては、国家の存在そのものが消滅していた。一応、エル・ファシル共和政府という体裁（ていさい）だけは整っていたが、実質的には個人の私軍でしかない。そんな戦闘集団が戦争の主役になるなど、人類史上、極めて稀な異常事態だった。
さらに特異であったのは、この戦いの結末である。一個人の動向が勝敗を決するなど、これほど大規模な戦闘では、まさに在り得ない奇跡か神話の範疇だった。

ヤン・ウエンリーの戦いぶりは、智将というよりは猛将と呼ぶ方がふさわしかった。既に、ファーレンハイト、シュタインメッツ両上級大将がヴァルハラの門をくぐり、帝国軍が圧倒的優位にあるはずなのに、一方的におされっぱなしだった。さすがはヤン・ウェンリーという賞賛が、味方だけに止まらず敵軍からも聞かれたほどである。

ヤンが帝国軍の防衛陣をかいくぐり、天底方向からラインハルトの本隊にビームとミサイルをあびせかけ、至近から鑑列に突入してきた時である。
「ロイエンタール、俯角三十度、二時方向に火線を集中させよ。敵の艦列に穴があいたら、そこを圧迫して突き崩せ」

頬を紅潮させたラインハルトが呼吸をはずませて命じた。
「はっ」
ロイエンタールには、それ以上の説明を聞く必要はなかった。ヤンの猛攻を粉砕しうるポイントを一瞬の内に把握した、主君の天才性を改めて認識し直す思いだった。

「いけません」
ロイエンタールは自分の目を疑った。
「どうか、僕に引き金を引かせないでください」
ユリアンの声は感情を示さず、無機質ですらあった。

「何の真似だ、これは」
ラインハルトの怒りを含んだ声が、静まりかえった艦橋に響いた。どの顔も驚きを示したまま、ユーリ・ペトロフに集中していた。今の今まで無害と思われていた子犬が、突然猛獣となって牙をむいたのだ。
次の瞬間、複数の銃口が彼に向けられた。
「撃たないで。爆発しますよ」
ユリアンは大声で警告すると、ポケットからゼッフル粒子発生装置を取り出してみせた。ぽんと床に放り出す。もし銃を使えば空気中に浮遊するゼッフル粒子に引火爆発して、共倒れになること間違いない。
「ユーリ！」

「ロイエンタール元帥、すぐに全軍に停戦命令を。それと、ヤン艦隊に通信を」
これ以上ないほど冷静な声だった。
ロイエンタールはそんなユーリが信じられなかった。つい、先程まで、緊張しきって今にも倒れそうに見えていたのに。
実際、ユリアンは緊張していた。ただ、ロイエンタールの想像と

は違い、戦闘が原因ではなかった。この状況にあって、どう行動すべきか決めかね、悩んでいたのである。
一旦、心を決めると、もう迷いはなかった。自分の成そうとしていうことがどれ程大それた事か承知していたが、やるしかないのだ。

「馬鹿なことを、その様なことが出来るか」
ラインハルトの瞳が苛烈にきらめく。
「皇帝、あなたにはお出来にならないでしょう。命を惜しんで屈服なさる方ではいらっしゃいません。しかし、あなたの部下は違います」
ユリアンがロイエンタールに向き直った。
「元帥閣下、どうぞ僕の要求をおのみ下さい。でないと、皇帝の命はありません」
「ならぬ。ロイエンタール！」

数瞬の沈黙の後、ロイエンタールは通信士に命令した。
「全軍へ停戦命令を。敵軍に向けて、超光通信をひらけ」
ラインハルトは唇を噛み締めたまま、何も言わなかった。

第二章　3

突然の停戦に驚愕しなかった者は、一人もいなかった。帝国軍は無論のこと、通称ヤン・ウェンリー軍でも、相手の意図を計りかね、戸惑いを隠せないでいる。

「どうしてこうなるんだ」

ヤン・ウェンリーでさえ、あっけにとられていた。停戦そのものは歓迎すべきことだったが、理由がさっぱり分からない。

それでもヤンは攻撃を中止し、その場で臨戦態勢のまま待機を命じた。もし、帝国軍に動きが生じたら、そのままブリュンヒルト目掛けて飛び込むまでである。

奇妙な緊張状態の中で、通信妨害がどちらからともなく止められた。

ヤンの乗る戦艦ユリシーズと旗艦ブリュンヒルトの間に通信回路がひらかれ、互いにスクリーンを通じて向き合った。密集状態にある全ての艦船がそれを傍受し、耳をそばだてている。

「ヤン提督」

第一声は、思いもよらぬ人物のものだった。

「ユリアン?!お前、なんて格好だ。そんなところで何しているんだ」

連戦の疲れで、やや肉の落ちたヤンが呆れた声を出した。

「今、ブリュンヒルトの艦橋を占拠しているところです。勝手なことをして、申し訳ありません」

帝国軍の軍服を着用したユリアンが応えた。

ヤンはぽかんとして口を開けたまま、絶句してしまった。

「ゼッフル粒子を使いました。もし、ご命令を頂ければ、銃を発射します」
「ば、馬鹿なことを言うんじゃない。そんな、とんでもないよ。すぐ、銃を下ろしなさい」
「嫌です」
ユリアンはきっぱりと言い放った。
「こればっかりは、いいつけに従えません。提督、僕のわがままを聞いてください。聞いて頂けないなら、今すぐ自爆します」

「ユリアン！　落ち着け」
狼狽の色を浮かべて、ヤンが叫ぶ。司令官のそんな姿は、ヤン艦隊のメンバーにとって初めて見るものだった。フレデリカが心配そうに、スクリーンと夫を交互に見やる。

「提督、どうか、対等の条件で、皇帝ラインハルトと会談なさって下さい。彼は素晴らしい人物です。側にいて、良く分かりました。僕には、お二人が傷付け合うのを、これ以上見ていられません」
ユリアンは真摯そのものだった。
「駄目だとおっしゃるなら、僕のとる道は一つです。このままここに止まって、人質になるつもりはありません。皇帝が死ねば、提督はお勝ちになれるでしょう。これぐらいしか、僕に出来ることはありませんから」

ヤンが髪を盛大に掻き回した。大きく溜め息をつく。
「ユリアン、ユリアン、お前は本当に知能犯だね。私がお前を死なせるはず、ないだろう。分かった。会談に応じるよ。だけど、皇帝は承知してくれたのかい」
初めてユリアンの顔に困惑が浮かんだ。

その時、スクリーンにラインハルトが姿を見せた。

銃を持つユリアンに背を向けたまま、動じる様子もない。

「ヤン・ウェンリー、久し振りだな」

聞き間違えようのない声が響いた。

「一つだけ聞きたい。この男は何者なのだ」

「はい、あの、私の息子です」

どよめきが、通信を傍受していた帝国軍の全ての艦船からあがった。

ラインハルトは眉をしかめた。

「息子だと。確か卿は三十三才と聞いていたが」

ユリアンは十八才である。計算が合わない。

「はぁ、法律上の被保護者です。同盟にはトラバース法というのがありまして、戦没軍人の孤児を軍人の家で養育するという内容なんですが、それで私の所へ送られて来て、その、家出してしまって、行方不明だったんですが、私の家族です」

なんとも、とりとめのないない説明だったが、意味は通じた。

ロイエンタールが刺すような視線をユリアンに投げ付けた。

「そうか、分かった。そのような者を身近に置いた余の落ち度だ。文句は言えぬ。ユリアンとやら、好きにするが良い。余は脅迫に屈したりはせぬ」

「お待ち下さい」

皇帝の翻意を求めたのは、ヤン・ウェンリーだった。

「あなたは死んではいけません。とんでもないことです」

敵将の意外な言葉に、帝国軍は驚いた。

ヤン・ウェンリーこそが、皇帝ラインハルトの命を狙ってるではないか。それが、皇帝に向かって死ぬなだと？

「皇帝ラインハルト、あなたが今死ねば、ローエングラム王朝は終わりです。アレクサンダー大王の打ち立てた帝国の様に、一夜の夢で消えてしまうでしょう。そうなったら、せっかく達成された人類の統一はどうなります。あなたの部下達は仰ぐ旗を失い、間違いなく権力争いが起こります。そうなったら、多分、いや、確実に内乱になる。あなたには、国民の幸福を守る義務がある。民衆を戦乱に巻き込んではいけません。あなたの一存で命を捨てて良い訳がない」

ヤンは夢中で喋っていた。二秒スピーチでならした彼にしては、異例の事である。

「あなたは以前言われた。だれの命令もきかずにすむ力が欲しかったと。力には責任はともないます。あなたなら、四百億の人間に責任を果たせる。どうか、それから逃げないで下さい」

「逃げるなだと。大した詭弁だな、ヤン・ウェンリー」

ラインハルトが怒気もあらわにスクリーンを睨みつける。

豪胆でならすシェーンコップでさえ、一瞬、首をすくめた。動じなかったのは、ヤン・ウェンリーだけである。

「統一と平和を疎外しているのは、卿自身ではないか」

「はぁ、その通りですね」

ヤンが反論しようとしないので、ラインハルトは間をはずされた形になった。

怒気が空回りし、いまいましげに一つ深呼吸をして気を静める。

我ながら柄にもない演説をしてしまったなと思いつつ、ヤンはベレーを取って頭を掻いた。

「えーと、それじゃあ、こうしましょう。降伏を申し込みます。条件付きで。条件を検討するために、そちらへお邪魔させていただけませんか。交渉中、停戦を続ける条件として、私の被保護者の身柄を人質としてお預けします。いかがでしょう」

形の上からは、ヤンの一方的な譲歩にみえる。しかし、実質的にはユリアンの求めたものと変わりがない。

「陛下、どうぞ、ヤン・ウェンリーの提案をご検討下さい」

ロイエンタールが真剣に言う。

ともかく、出口が見つかったのだ。自分の死など厭わないが、皇帝を死なせるわけにはいかない。いまいましいが、ヤン・ウェンリーの言うとおりである。

「分かった、卿の申し出を受けよう」

明らかにほっとした表情で、ヤンが頭を下げた。

「有り難うございます。ああ、ちょっと、息子に話をさせて頂けますか」

ラインハルトが頷いた。

「ユリアン、そういうことになったから、銃をおろしなさい。人質役、頼むよ。早まるんじゃない。死んだら、人質として役に立たないんだからね」

「はい、ごめんなさい」

ユリアンには、ヤンの心配りが分かっていた。

皇帝暗殺を企てたかどで、死刑を免れぬところを、人質とすることでかえって身の安全を計ってくれたのである。

「まったく、危ないことするんじゃないって、いつも言ってあるだろう。おとなしく待っているんだよ。迎えに行くからね」
「はい、待ってます。本当にごめんなさい」
ユリアンは不覚にも涙ぐんでしまった。
ギュンター・キスリング准将が、その手から銃を取り上げた。
ユリアンは抵抗しなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6293o/

ＨＯＭＥ

2010年12月22日22時57分発行